

龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門
人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター

研究テーマ

「世界の苦悩に向き合う仏教の智慧と慈悲—仏教の実践的研究」

Buddhist Wisdom and Compassion in Response to Suffering in the World: Practical Buddhist Studies

人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター長 鍋島直樹

「世界仏教文化研究センター」の研究目的

龍谷大学は、建学の精神である「浄土真宗の精神」すなわち「生きとし生けるもの全てを迷いから悟りに転換させたいという阿弥陀仏の誓願」を依りどころとし、その願いに生かされ、「真実の道を歩まれた親鸞聖人の生き方に学び、真実を求め、真実に生き、真実を顕かにすることのできる」人間育成をめざしている。「世界仏教文化研究センター」は、本学の特色ある建学の精神を研究面において具現化しようとするものである。

本研究センターは、仏教を機軸とした総合的学術研究を、基礎研究部門、国際交流推進部門および応用研究部門の三部門による連携の下に推進し、「人間・科学・宗教」の三領域が融合した新たな知の創造に努め、仏教研究の国際的ハブを構築すると共に、その成果を効果的に教育へ還元することを目的とする。

1 仏教の総合的学術研究

仏教の思想・歴史・文化に関する総合的学術研究を行い、かつ現代世界の諸課題・苦悩に応答する実践的な仏教研究を推進する。

2 「人間・科学・宗教」の三領域の融合による学際的研究と新たな知の創出

「人間・科学・宗教」の三つの領域を融合することにより、21世紀における新たな知を創造する。国内外の研究者が交流できる世界的な研究拠点を形成し、人間の苦悩や地球規模の危機に対して、仏教の知見から、解決への道筋を示すことに取り組む。

3 仏教研究の国際的プラットフォーム形成

アジア、アメリカ、ヨーロッパなど海外の大学・研究機関と協力し、海外の研究者・仏教者・宗教者との相互交流を促進する。総合的学術研究の成果を、国際研究部門においてE Journalを刊行し、ウェブサイトにて英語など諸外国語によって発信する。

4 学部・大学院教育プログラムの展開

世界仏教文化研究センターは、学部・大学院を含めた講義・シンポジウムと連携し、次世代を担う学生や研究者を育成する。情報コミュニケーション・テクノロジー(Information Communication Technology: ICT)を駆使して世界の大学・研究機関とリアルタイムでつなぎ、大学院並びに学部における教育にも有効に活用する。また、遺跡調査など海外研究機関からの協力要請に際し、迅速に対応できる体制を構築する。

龍谷大学世界仏教文化研究センター応用研究部門

人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター

常設研究「世界の苦悩に向き合う智慧と慈悲—仏教の実践的研究」

Center for Humanities, Science and Religion “Buddhist Wisdom and Compassion in Response to Suffering in the World: Practical Buddhist Studies”

1. 常設研究センターの概要

応用研究部門「人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター (Center for Humanities, Science and Religion 略称 CHSR)」は、仏教・浄土教を機軸として、現代世界の苦悩や悲嘆に全人的に向き合い、社会の困難を和らげることにつながる実践を産み出す研究を推進する。医療をはじめ、諸科学と協力し、生老病死の苦悩を超える仏教の智慧と慈悲に学びながら、仏教の救済観の意義を生かした研究をめざす。

人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターは、常設研究センターとして、常設研究と時限的な萌芽的公募研究を置く。2016年度より本常設研究に着手し、2018年度より萌芽的公募研究を開設する。

常設研究テーマ「世界の苦悩に向き合う仏教の智慧と慈悲—仏教の実践的研究」

1 常設研究センターが取り組む研究課題

(1) 仏教を機軸とした宗教教育への継承と開発（他者への思いやりや生命への慈しみを育む情操教育、道徳と宗教、臨床宗教教育、宗教多元時代の宗教間教育）

(2) 宗教と医療・社会福祉の連携による患者・家族の全人的支援（死生学、緩和ケア、グリーフケア、臨床宗教師養成）

(3) 仏教と社会实践（大震災復興支援、自殺対策・自死遺族支援、地域寺院活性化）

(4) 仏教と環境保護・経済（縁起的生命観の社会的活用、地球と人類の持続可能性）

(5) 平和のための宗教間協力と宗教間対話（interfaith partnership for peace）

なお、2015年度～2019年度の文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業「アジア仏教文化研究センター」と協力して応用研究部門の研究を遂行することができる。

2 萌芽的公募研究

2018年度から、世界の苦悩や悲嘆に寄り添う仏教の実践的研究を積極的に支援するために、応用研究部門に「萌芽的公募研究」枠を設ける。

2. 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターの設置理念 2002

1. 建学の精神に基づいた研究教育の推進

龍谷大学は建学の精神に基づき、生きとし生けるもの全てを迷いから悟りに転換させたいという阿弥陀仏の誓願を依りどころとし、その願いに生かされ、真実の道を歩まれた親鸞の生き方に学び、「真実を求め、真実に生き、真実を顕かにする」ことのできる人間育成をめざしている。そのために「人間・科学・宗教」の三領域が融合する新たな知の創造に努め、平等、自立、内省、感謝、平和に結びつく研究に取り組んでいる。人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターは、それを具現化しうるセンターである。

2. 「人間・科学・宗教」の三領域の連携による学際的研究と新たな知の創出

およそ「人間」とは、仏教において生きとし生けるものの一員、衆生であり、迷いと罪業を重ねて生死輪廻する凡夫でありつつ、自己中心的な傲慢さを反省し、世界の安穏を願って生きようとする菩薩的存在でもであるとされる。

「科学」とは、現象の構造や法則性を解明し、その成果を社会の技術や政策に反映させるための知見である。その科学の応用には、生活向上や生命の保護に寄与する光の側面と、核兵器や環境破壊などに悪用される影の側面とがある。



「宗教」とは、窮極的危機に際して、自己を照らし生きる意味に気づかせ、人類の歩むべき方向を示す羅針盤のような働きを有する。宗教とは自己の姿を映す鏡であり、大悲に照らされて、人類の光と闇をふりかえり、宗教と科学とが対話協力しながら世界を安寧に導いていくことが求められる。

ふりかえてみると、20世紀における「科学」的成果は高度な文明を生み出し、世界の経済的發展をうながした。人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターは、21世紀まで「科学」的成果がもたらした光の側面とともに、環境破壊、核兵器、戦争などに象徴される闇の側面をふりかえり、仏教の智慧と慈悲を基盤にして、世界の抱える苦悩や悲嘆に向き合い、仏教・浄土教が世界の課題解決のために貢献しうる道を探求する。具体的には、人間のより深い価値、すなわち、命の無常さに思いをいたし、生きとし生けるものへの慈しみを育む死生学を研究する。一人ひとりの生命を尊重する智慧と慈悲を礎にして、世界の安穏と平和につながる研究教育を次世代に継承していきたい。

3. 人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センターの歴史と第三者評価

2002年に文部科学省私立大学学術高度化推進事業「仏教生命観に基づく人間科学の総合研究」が採択されて以来、文科省プロジェクト採択3回、龍谷大学学術高度化推進事業採択1回を経て、2015年度より世界仏教文化研究センター応用研究部門を担う。

2002年度～2006年度

文部科学省私立大学高度化推進事業「仏教生命観に基づく人間科学の総合研究」

文科省最終評価 AA

2007年度～2009年度 継続

文部科学省私立大学高度化推進事業「仏教生命観に基づく人間科学の総合研究」

文科省最終評価 AB

2010年度～2012年度

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

「死生観と超越 仏教と諸科学の学際的研究」

文科省最終評価 BB

2013年度～2015年度 龍谷大学選定研究プロジェクト

「仏教・浄土教を機軸としたグリーンサポートと救済観の総合的研究」

第三者評価 AA

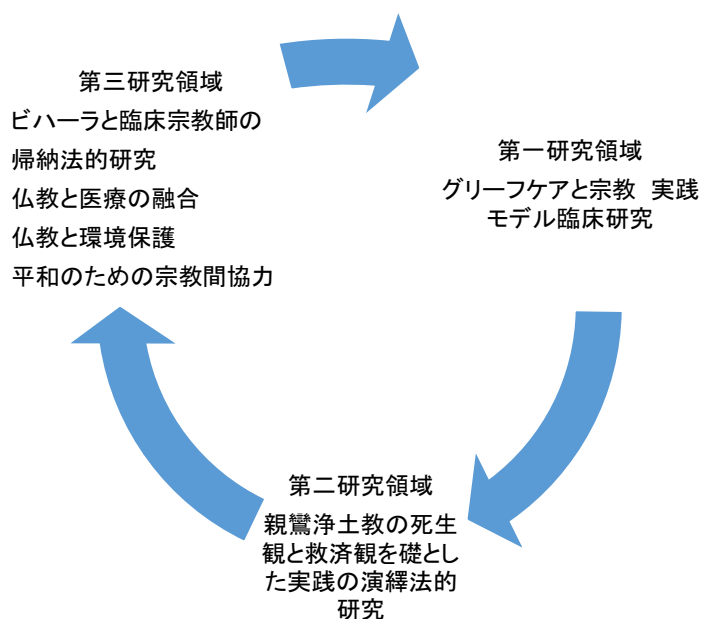
2016年度～ 世界仏教文化研究センター応用研究部門・常設研究センター

「世界の苦悩に向き合う智慧と慈悲—仏教の実践的研究」

協力機関 上智大学グリーフケア研究所、東北大学大学院文学研究科、IBS, BSC 等

4. 研究目的と意義

世界における生老病死の苦悩と悲嘆を学ぶ意義は、人々がそれぞれの死を見つめ、限りある人生の意味や人間を見直し、互いに愛情をもって接するところにある。仏教の「生死」の意義は、「死生」と同様に、あらゆるものが無常にして稀有であることを自覚させるとともに、曠劫より久しく流転輪廻し、迷い・苦・罪を繰り返しているという反省を促し、時空を超えてあらゆるいのちが相互に関係しあっている一体感も育む。医療・社会福祉の連携により、生老病死の四苦を超える仏教死生観とビハーラの意義を再評価し、生きることの意味、死から生まれる志願、慈愛、感謝を育む教育を世界に発信するところに、研究の目的・意義がある。はるか昔、旧石器の時代の人々はすでに墓を作り、花を手向けて、亡き人への慈しみを表した。人類は、世界のさまざまな地域で、世俗を超えた宗教の真実に照らされながら、病人や高齢者を看取った。戦争の悲しみから、非暴力と平和を願った。大災害による死別の悲しみから、防災を願って手を合わせる。別離は、愛情の尊さや人生の意味に気づかせ、死を超えた依りどころを求めさせる。そこで、仏教の人間観、死生観、救済観に学び、生老病死に関わる人間の苦悩と悲嘆に向き合い、その苦悩と悲嘆を超えていく道を解明するのが、この研究目的・意義である。



5. 年次計画

平成 28 (2016) 年度 グリーフケア公開講座、グリーフケア公開講座、学術講演、日本タイ国際シンポジウム、被災地支援・医療福祉機関ビハーラ関連施設フィールドスタディ・Home Page、

年次報告書

平成 29 (2017) 年度 グリーフケア公開講座、学術講演、日本タイ国際シンポジウム、被災地支援・医療福祉機関ビハーラ関連施設フィールドスタディ、Home Page、年次報告書、成果出版

平成 30 (2018) 年度 グリーフケア公開講座、学術講演、学会発表、被災地支援・医療福祉ビハーラ関連施設フィールドスタディ・Home page、年次報告書、成果出版

平成 31 (2019) 年度 グリーフケア公開講座、学術講演、被災地支援・医療福祉ビハーラ関連施設フィールドスタディ (4 回)、Home Page、年次報告書、成果出版

平成 32 (2020) 年度 グリーフケア公開講座、学術講演、国際シンポジウム、医療福祉ビハーラ関連施設フィールドスタディ・Home Page、年次報告書、成果出版

6. 成果概要 三つの研究領域の相互研鑽

(1) 第一研究領域「グリーフケアと宗教—実践モデルの臨床研究」

初めて上智大学グリーフケア研究所と龍谷大学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター間で定款を締結し、グリーフケア公開講座を全 16 回有料で開催できた。上智と龍谷の両センターの定款とは、受講料収入から講座運営に係る必要経費支出を差し引いて清算し、黒字の場合は両センターで折半し、次年度に研究助成金として両センターに充当する制度である。本年度は受講者が多く黒字になり、次年度研究費として運用する。

新設グリーフケア公開講座「悲しみを乗り越える力」 前期 8 回・後期 8 回

主催 上智大学グリーフケア研究所・本学人間・科学・宗教オープン・リサーチ・センター

協力 京都大学こころの未来研究センター 場所 龍谷大学響都ホール

大切な人やものを喪失する悲しみ（グリーフ）は、すべての人がそれぞれのライフステージで経験する。家族や自分自身の病気、ペットの死、生き別れ、死別、学校や職場におけるいじめ、友達との別れ、失恋、卒業、離婚、孤立、挫折、失業などによって引き起こされる。悲しみには後悔が伴う。しかも人は死別の悲しみを経験することを通して、亡き人から受けた愛情に気づく。深い悲しみから、他者や自然への慈しみも生まれてくる。喪失の悲しみは、大切なものが何かを教えてくれる。それぞれの時代に、宗教・思想が誕生した背景には、人々に深い悲しみや迫害があった。そしてその深い悲しみからこそ、生き抜く宗教的な智慧と慈しみが生み出されていった。本講座では、悲しみを理解し、悲しみを見つめることを通して生きるこの意味、死の意味を考えた。新たに得た知見の一つは、島蘭進による講演を通して、悲しみを乗り越える力をどこかに求めるのではなく、悲しみそのものが乗り越える力になるということであった。

(2) 第二研究領域「親鸞浄土教の死生観・救済観を礎とした実践の演繹法的研究」

幾世紀にもわたって何億人もの人たちが、さまざまな地域の宗教から計り知れない恩恵をこうむってきた。宗教者の愛と慈しみが、孤独の中にある人々の苦悩や悲嘆にぬくもりとなって届き、生きる勇気と希望を与えてきた。

宗教的实践とは、宗教的救済観を依りどころにして、相手の苦悩に寄り添い、相手の人生観、価値観を尊重しながら、相手に応じた教説を提供し、生きる力を育むことである。仏教・浄土教の人間観、死生観、救済観を依りどころとする宗教的実践の姿勢とは何か。如来の大いなる慈悲に抱かれ、御同朋として、困難にあえぐ人のそばにいて話を聞き、相手の人生の全行程をまるごと認めるところから宗教的実践が始まる。ケアとは、様々な面を持つその人の人生の物語をそのままに受けとめることであり、苦境の中で相手が示す優しさに学ぶことである。礼拝は、忙しい日常の中で自己をふりかえり、大切なものに気づかせる。追悼法要は、苦楽を共にした家族縁者が集まり、仏前に手を合わせて、故人を追慕し、聖教を誦読して仏徳を讃嘆し、報謝の大道を歩む推進力となる。

こうした親鸞浄土教の実践理念は、「御同朋御同行」「自信教人信」「摂取不捨」「報恩感謝（知恩報徳）」「常行大悲」「ぬくもりとおかげさま」「屑籠のように人々の悩みを受けとめる」「くつろぎ」などに表され、決して見捨てられることのない仏の大悲に抱かれて、御同朋として人々の悲しみに寄り添うというビハーラ活動の理念に表れている。

（3）第三研究領域「ビハーラ活動と臨床宗教師の帰納法的研究」

1) 「苦悩と悲嘆に寄り添う臨床宗教師—臨床宗教教育の可能性」

本研究プロジェクトは、大学院教育プログラムに展開する形で進めている。臨床宗教師研修は、スピリチュアルケアと宗教的ケア、グリーフケアを理論と臨床の両面から教育研究している。臨床宗教師研修の開設によって改めて研究の方向性と課題を確認できた。臨床宗教師研修は、宗教者として全存在をかけて人々の苦悩や悲嘆に向き合い、そこから感じ取られるケア対象者の宗教性を尊重し、公共空間で実践可能な「スピリチュアルケア」と「宗教的ケア」を学ぶことを目的とする。

- ① 「傾聴」と「スピリチュアルケア」の能力向上
- ② 「宗教間対話」「宗教協力」の能力向上
- ③ 自らの死生観と人生観を養う。
- ④ 宗教者以外の諸機関との連携方法を学ぶ
- ⑤ 幅広い「宗教的ケア」の提供方法を学ぶ

この臨床面での教育研究は、東日本大震災被災地、仮設住宅集会場、阪神淡路大震災被災地遺族との交流、あそかビハーラ病院（緩和ケア）、ビハーラ本願寺、常清の里（高齢者社会福祉施設）、橘保育園・橘デイサービスセンター（統合型社会福祉施設）、広島平和記念資料館と追悼記念館における被爆者講話と交流、キリスト教NCC宗教研究所のドイツ人聖職者との宗教者間交流、神戸赤十字病院「災害遺族の心のケア」研修など150時間を超える研修を行う。また会話記録検討会、臨床宗教師研修ふりかえりなどを行う。その反省と成果報告を踏まえて、新春シンポジウム「臨床宗教師の役割と可能性」を開催した。

新たに得た知見は次の通りである。死が間近に迫った患者とその家族、突然の災害で愛する人を失った人たちには、その喪失に伴う悲しみや後悔が残っている。グリーフ（喪失に伴う悲

嘆) ケアを必要とする人々に、臨床宗教師が果たすべき役割とは何か。それは医師、看護師ら専門職とチームを組んで、ケア対象者の悲しみや苦しみに全人的に向き合い、その人の支えとなるものとのつながりを再確認し、生きる力を取り戻せるように支援することである。特に、生きる意味への問い、死後の不安などについて、ケア対象者の人生観、信仰を尊重して支えることが臨床宗教師に求められる。臨床宗教師は、一人ひとりの解決のつかない課題に向き合い、相手と共に答えを探す宗教者である。

2) 「慈悲と非暴力を機軸とした平和構築 平和のための宗教者間協力と対話」

ユダヤ教ではモーゼの十戒の第六番目に、「あなたは殺してはならない」と教える。『旧約聖書』には、「剣は鋤の刃へ変えることができる」(「イザヤ書」二章四節。「ミカ書」四章三節)とある。実際、国連本部の向かい側にある公園の石碑に、“They shall beat their swords into plowshares. And their spear into pruning hooks. Nation shall not lift up sword against nation. Neither shall they learn war any more. Isaiah”「彼らは剣を打ち直して鋤として、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。イザヤ」と記されている。イスラムのコーランは、「不幸や逆境のときにも耐え忍ぶものこそが誠実なものである」と教える。仏教は「敵に対しても慈悲の心をもて」と説く。そして「世の中の強剛な者どもでも、また怯えている者どもでも、すべての生きものに対する暴力を抑えて」(『スッタニパータ』三九四偈)と説いている。人間は宗教の相違にかかわらず、誰でもわけへだてない愛と慈悲によって、平安な世界を築いていけるはずである。仏教を機軸とする臨床宗教師は、非暴力と平和な社会の実現を願う。他宗教と対話することは、相互の宗教的死生観や平和観を学びあい、宗教の社会的役割を確かめ合う機会になる。また、同じ宗教者として、世界の苦難を和らげるために、宗教間で協力する道も開かれる。

特筆すべき成果は、2017年1月29日、「世界の苦悩に向き合う仏教の可能性」というテーマのもとに、世界仏教文化研究センター開設記念事業特別講演会を開催でき、新たに得た知見を得たことである。ジャーナリストの池上彰は、「私が仏教徒であることを自覚したのは、ダライ・ラマ14世との対話がきっかけです。彼は中国共産党の弾圧でチベットからインドに亡命しましたが、相手を恨むことなく慈悲の心をかけます。また、パリ同時多発テロで妻を失ったジャーナリストの遺族であるジャーナリストのアントワヌ・レリスの手記にはテロリストに対し「君たちに憎しみという贈り物はあげない。怒りで応じることは、君たちと同じ無知に屈することになる。君たち(イスラム過激派)を憎しまない。怒りで応じると、君たちと同じ無知に屈するから」と呼びかけましたとの意味が書かれています。キリスト教徒も仏教もともに似た慈悲の心を持っているのです。」と教えてくれた。東洋大学学長・仏教哲学の竹村牧男は、「経済的な効率や業績を重視する競争原理がグローバルスタンダードとなり、その過程で格差問題や環境問題が現れたこと。この根底には、強烈な個人主義があります。一方、仏教では「無我」を説きます。その時々のかげがえのない主体はあっても、常住する自我はありません。こうした「無我」の見方は、自己は他者の存在があって成立するという「縁起」の思想につなが

ります。つまり、人間はお互いに支え合っはじめて生きられる存在というわけです。今後、多文化共生となるべき地域社会のあり方や、新たな文明原理を考えるうえで、こうした考え方は、大きな意味を持つでしょう。」と教えてくれた。龍谷大学学長・仏教史学の赤松徹眞は、「仏教の慈悲の心が世界の対立要因を解決しうるとのお話でしたが、仏教の可能性を開く場所や活動についてどうお考えですか。」と尋ねた。池上彰は、「アメリカでは教会に行かない人が増える一方、仏教に関心が集まっています。ただダライ・ラマ 14 世の影響から、多くのアメリカ人の中での仏教はチベット仏教です。日本にはいろんな宗派の仏教があることを知ってほしい。外国人観光客に、日本のお寺はどんな教えなのかを外国語でわかりやすく紹介し、アピールすることが良いチャンスになるでしょう。」と答えた。また、赤松徹眞は、「龍谷大学は東日本大震災以降、毎年学生ボランティアを送り出しています。こうした長きにわたる困難に対して仏教はどう関わるべきでしょうか。」と問いかけた。池上彰は、「例えば、目の前で家族を津波に流され、自分だけ生き残ったことを責めている人に対して、寄り添い話を聞く臨床宗教師の存在が注目されています。龍谷大学も取り組まれているとのことで、そこに仏教活動の息吹を感じました。」と答えた。支えあって生かされているという縁起の見方を育み、憎しみにとられずに、憎しみに対して慈悲の心をもつという姿勢に、平和への道があることがうかがわれる。

(3) 若手研究者 PD と RA の研究推進

2016年度より採用された PD 金澤豊と RA 大澤絢子の両名は、応用研究部門の研究を推進した。

①特別講義での研究成果発表、②グリーフケア公開講座の運営とアンケート集計を講師に届けることによる研究支援、③グリーフケア公開講座、特別講義、シンポジウムの成果概要報告書作成、④論文執筆、⑤年次報告書の作成などの面で、本センターを前進させた。